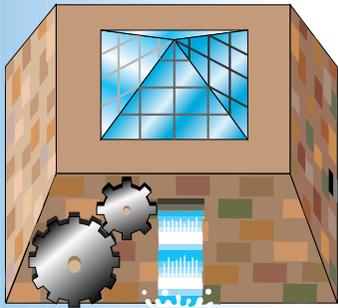


3 大和川を治める



大和川が今のすがたになるまでに、人びとはどのような努力やくふうしてきたのか調べてみよう。



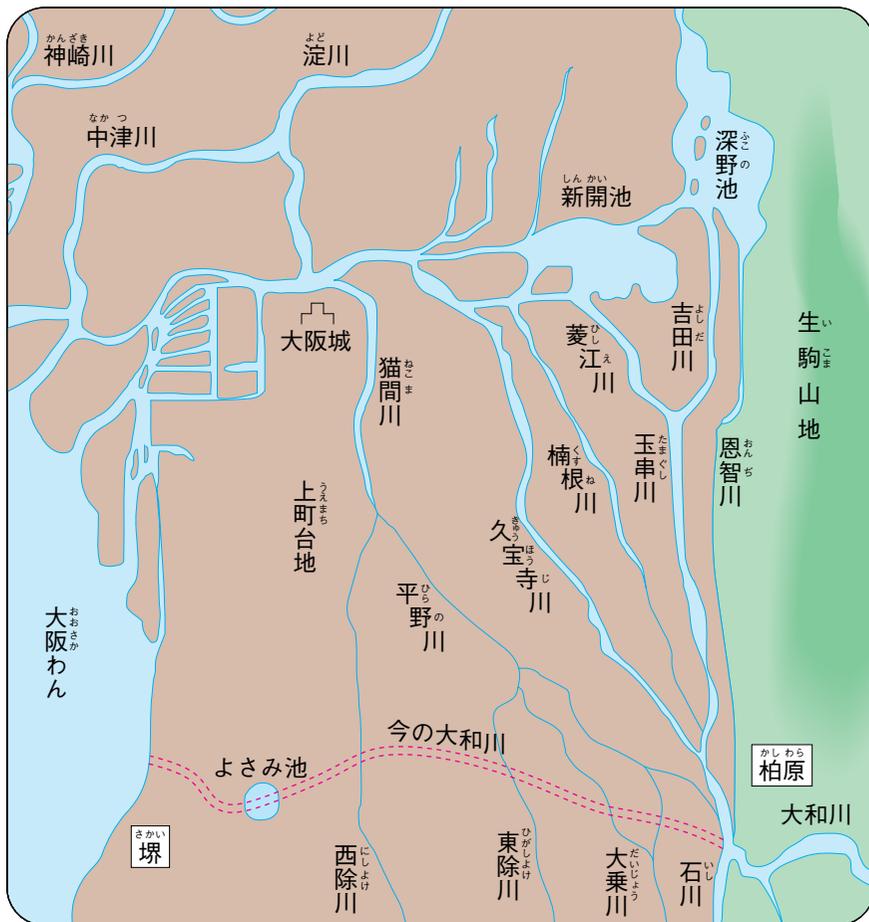
昔の地図には、今の大和川がないわね。



今の大和川は、いつごろからあるのかな。



(1) 昔の大和川の様子



▲昔の大和川の川すじ（江戸時代のはじめのころ）

まりえさんは左のページの地図を見て、昔の大和川について調べてみました。

奈良ぼん地の水を集めて流れる大和川は、生駒山地と金剛山地の間を通過して大阪平野に流れ出ています。

大阪平野では、上町台地が南から北につき出ているため、東から流れてきた大和川は、南から流れてきた石川と合流してから北へ流れていきます。

そして、大和川は玉串川、久宝寺川などに分かれて流れながら、大阪城の北で淀川に合流し、大阪わんに流れこんでいたことなどがわかりました。

しかし、川底に土やすななどがたまるため、大雨がふると大和川の川ぞいで水があふれてしまうことになり、洪水になることが多かったそうです。

そこで、まりえさんたちは、昔の大和川の洪水について調べてみました。

石 昔の体積（かさ）の単位で、おもに米をはかるときに使いました。1石は約180ℓです。

くり返す大和川の洪水

年代(年)	できごと
一六八五	新開池が土やすなでうまる
一六八一	堤防が各地で切れ、特に深野池、玉串川、菱江川の堤防が切れる
一六七六	堤防十か所が切れる
一六七五	堤防十九か所が切れる
一六七四	堤防三十五か所が切れる
一六三五	国分、船橋、弓削村の堤防が切れる
一六三三	ひ害 柏原村、船橋村、国分村の堤防が切れる。民家五十けんが流され、三十六人が死ぬ。約二万石の田が
一六二〇	石の田がひ害 柏原村の堤防が切れ、約二万四千
一五六三	河内の国（今の大阪府）の約半分の水につかり、一万六千人が死ぬ
一五四四	七月、近畿地方に大洪水
七八八	和気清麻呂のつけかえ工事
七八五	河内の堤防三十か所が切れる

(2) 川ぞいの人びとの苦し^{くる}み

まりえさんたちは年表を見て、堤防^{ていぼう}が切れて川の水があふれ出ると、家や田が流されて、多くの人の命がきけんにさらされるということがわかりました。また、いったん洪水^{こうずい}がおこると、食べる物がなくなったり、伝せん病^{でん びょう}がはやったりすることもわかりました。

洪水のあとで、切れた堤防や、どろやすなでうまった田畑をなおしたりすることも、たいへんなことだと思いました。



▲昔の洪水のようす (1868年の大和川の洪水をえがいた「洪水図説」より作成)

和気清麻呂^{わけのきよまる}の大和川つけかえ工事

今から1200年くらい前、和気清麻呂^{わけのきよまる}が摂津^{せつ} (今の大阪府北部^{おおさか ぶ}と兵庫県東南部^{ひょうご}) の地方長官^{ちようかん}だったころ、たびたび洪水がおきたので、大和川の水の一部^{てんのうじ}を今の天王寺公園^{てんのうじ}の南側^{みなみがわ}に通して、大阪わんに流そうと考えました。しかし、とちゅう^{うえまち}に上町台地の坂があったため、たくさんのお金と人手をかけましたが、とうとう完成^{かんせい}しませんでした。

今のJ R天王寺駅の近く^{ジェイアール}がその工事のあとだといわれています。堀越町^{ほりこし}、北河堀町^{きたかわほり}、南河堀町^{みなみかわほり}などの町名や、河堀口^{ほりぐち}、河底池^{こぞこ}、堀越神社^{ほりこし}という地名や神社名がそのなごりとして今も残^{のこ}っています。



▲堀越神社

(3) 大和川のつけかえ

今から350年ほど前、今米村^{いまごめ} (今の東大阪市今米^{ひがしおおさか}) の庄屋^{しょうや}をしていた甚兵衛^{じんべえ}という人が、なかまと力を合わせて、川ぞいの土地のようすを調べました。そして、洪水^{ふせ}を防ぐには、大和川の水を石川^{いし}との合流点^{さかい}から西の方へ流すことがいちばんよいと考えて、幕府^{ばくふ}へ大和川のつけかえを願い出しました。

しかし、なかなか幕府のゆるしが出ませんでした。そして、幕府のなかでいろいろな意見が出て、つけかえる必要^{ひつよう}はないという意見に決まってしまうました。

しかし甚兵衛たちは、つけかえがだめなら、洪水によるひ害^{がい}がよくおこる地域^{ちいき}の水はけをよくするために、新しい水路をほってほしいということなどを幕府へ願い出しました。

つけかえを願う人びとのうったえ

- これまで川の底^{そこ}を深くする工事を何度もしていただきましたが、すぐに底が浅^{あさ}くなってしまう。
- 洪水になると、たまったどろがなかなかひかないので、生活にこまってしまう。
- つけかえれば、洪水がへって作物が多くとれるし、川や池のあとに田畑がたくさんできます。 (一部)

つけかえに反対の人びとのうったえ

- 新しく川になる所は、多くの田畑^{うしな}を失ってしまいます。村が2つに分かれるところもでてきます。
- 新しい川の南側^{がわ}は洪水がおこりやすくなり、反対に北側は水が足りなくなります。
- 川や池のあとには、作物がなかなか育つことができないので、田畑はできません。 (一部)

庄屋

村をまとめる仕事をしてきた人。地方によっては名主^{なぬし}ともいいいます。

甚兵衛

大和川のつけかえが完成してから、「中^{なか}」という名字を幕府からゆるされました。

幕府

武士^{ぶし}の頭である将軍^{しょうぐん}が日本全体^{にっぽん}を治めていた役所。

幕府の考え

「大和川の洪水に対して、今の大和川の川底を深くし、堤防を高くした方がよい」という、当時の土木工事のせん門家であった河村瑞賢^{かむらみずけん}の考えを取り入れました。

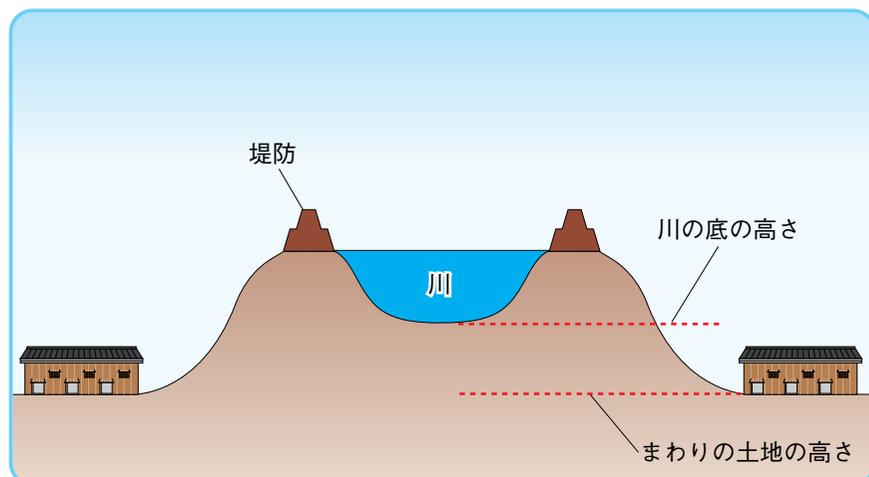


▲まわりの家より高い土手と川
（大阪府柏原市）

大和川は流れがゆるやかで、曲がりくねっていたために、川底にすながたまりやすく、それを取りのぞかないと、川はしだいに浅くなってしまう。

江戸時代になり、山の木をたくさん切るようになると、大雨のときに上流から流れてくる土やすながさらにふえました。

そのため幕府は、何度も川の底をほったり、堤防を高くしたりする工事をしましたが、甚兵衛が大和川のつけかえを願っているところには、川底の方が両側の田畑より高い、天井川になってしまう川が多くなっていきました。



▲天井川のしくみ

しかし、工事をくり返しても、いっこうに洪水のへるようすはみられず、それどころか、工事のあと、続けて大きな水害がおきたこともありました。

そこで、とうとう幕府は大和川をつけかえることに決めました。甚兵衛たちが大和川のつけかえを願い出してから50年近くもたった、1703年のことでした。

どうして50年近くも願いがかなわなかったのかな。



(4) つけかえ工事のようす

つけかえ工事は1704年の2月27日から始められました。

工事はおよそ半分を幕府が行い、残りは幕府がいくつかの藩に命令して行わせました。工事の責任や費用は、幕府と藩が分たんしました。働く人びとの世話は、近くの村などでしていたそうです。

藩 江戸（今の東京都）に幕府があり、日本を治めていたところ、将軍は地方を藩に分けて、自分の家来や大名に治めさせました。



▲工事に使った道具

今から300年ほど昔のことです。工事といっても今のようないくつかの機械はなく、すべてが人の力によって行われました。くわやすきで土をほったり、もっこやふごをかついで土を運んだりする工事が、たくさんの人によって毎日毎日くり返されました。

工事は始まった年の10月13日に終わりました。

数字でみる大和川のつけかえ工事

- 工事の日数…225日
- かかった費用…約71503両
- 工事をした人数…毎日約1万人
- 川の長さ…約14.3km
- 川のはば…約180m
- 堤防の高さ…約5m

※両…昔のお金の単位。1両は今の約20万円。

(5) つけかえ工事の苦労やくふう

ただしさんは、工事のようすについて調べました。

新しい大和川の半分以上は低い平地に流すため、川底をほっていきのではなく、堤防を盛り上げていくことがおもな仕事でした。そして、長い土手の形に積み上げてかため、じょうぶな堤防をつくっていききました。

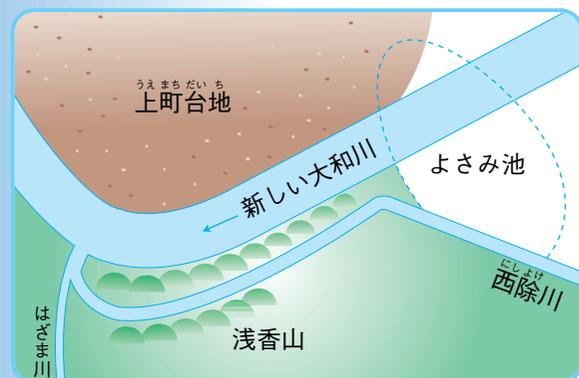
しかし、残りの部分、とくに浅香山の付近は高台となっていたため、ほっていかなければなりません

でした。そして、ほった土でよさみ池がうめたてられたといわれています。

また、このあたりの大和川は、よさみ池や浅香の谷を通り、南に大きく曲がって流れています。

●堤防の土は、落堀川をほった土や、長吉付近からほり進んだときの土などを使いました。

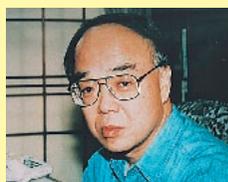
▼浅香山付近のようす



中甚兵衛はわたしのせんぞ…中好幸さんの話

甚兵衛は、みなさんがよく知っている水戸黄門と同じ時代の人です。そのころ、農民が幕府にお願いをするということは、命がけのことだったのです。自分で土地のようすを調べ、大和川をつけかえた後のこともしっかり考えていました。しかも、46年もかかってやりとげたのですから、ずいぶん勇気としんぼう強さを持った人だったのですね。

みなさんも、自分たちのまちや社会がよくなるように、勉強したことを生かしてがんばってください。

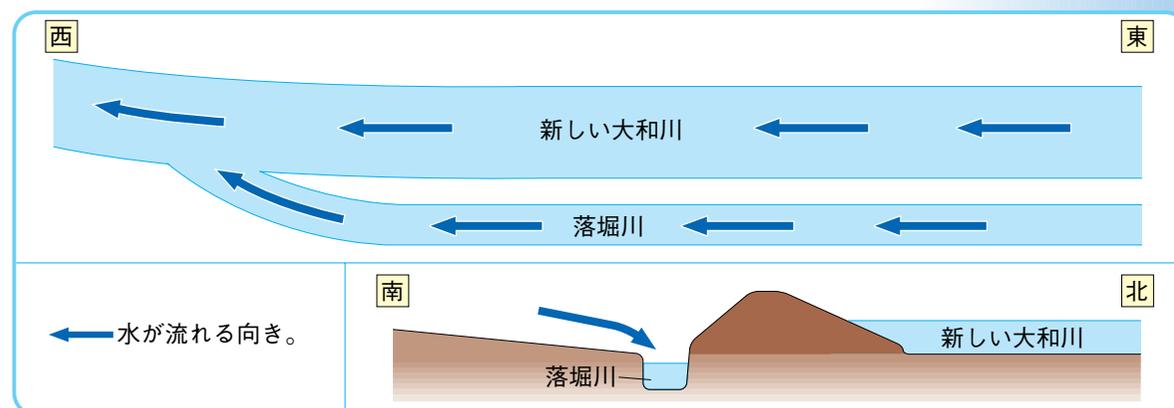


新しい大和川は、南から流れてくる大乗川、東除川、西除川を横切るかたちでつけかえられました。

これらの川の近くに住む人びとは、つけかえ前も毎年のように洪水による水害になやまされていて、新しい大和川の高い堤防ができると、水はけがもっと悪くなると心配しました。また、東除川や西除川が、新しい大和川にうまく流れこめず、水があふれるおそれもありました。

そこで、新しい大和川にそって長さが約13.2kmの落堀川をつくり、南から流れてくる水を一度ここに流しこみ、西の低くなったところで大和川に合流させました。

また、大和川に流れこむ落堀川の水をなるべくへらすため、大乗川を今の羽曳野市の古市のあたりで、石川に合流させました。



▲落堀川のしくみ

西除川も、大和川にそって西へつけかえ、低い浅香で大和川に合流させました。

▶落堀川 右の土手は大和川の堤防





▲わたの実



▲河内木綿でつくられたあつし(仕事着)

河内木綿は、せんいがたく、じょうぶで長持ちしたので、ゆかたやあつし、はた、酒しぼりのふくろなどに使われ、全国に名を知られるようになりました。

▼川あとにつくられた新田



※新田の多くは、大商人がつくりました。
 ※新田は、おもに久宝寺川、玉串川、深野池、新開池などのあとにつくられています。また、東除川、西除川、大乗川、よさみ池などのあとにもつくられています。

(6) 大和川つけかえのあと

大和川のつけかえで、人びとのくらしはどう変わったのでしょうか。大きな川や池のあとを大商人などが新田として開発しました。また、米作りにむかないすな地では、米作りより手間がかかりますが、高く売れる綿作りがさかんになり、「河内木綿」という名で全国に売られました。

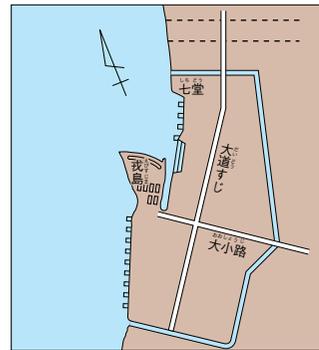
大和川のつけかえは、農民だけでなく、まちの人びとのくらしや大阪のまちの発てんにとっても、大きなできごとになりました。

しかし、元の大和川の川すじや元の東除川、西除川などの川すじでは、田畑に引く水が不足するようになり、人びとはたいへんな苦勞をしました。

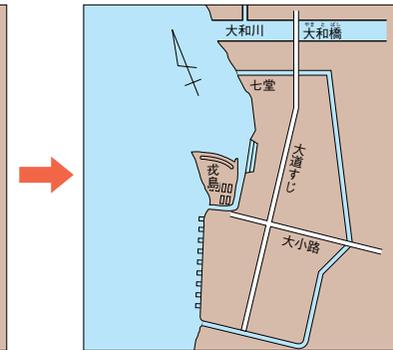
一方で、新しい大和川の川すじでは、元にあった田畑が川の底になり、かわりの土地をひらく苦勞をした人びとがいました。村が川の両側に分かれたところもありました。また、水はけが悪くなった村や、川を大和川と合流させたところなどでは、大雨がふるとよく洪水がおこるなど、まだまだ解決しなければならぬことも残りました。

堺の港の移り変わり

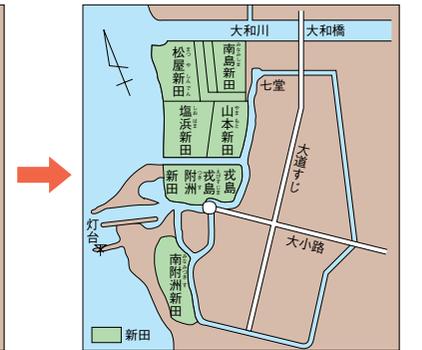
堺の港は、昔から人や荷物を運ぶ大小の船が出入りする、にぎやかな港でした。しかし、大和川が運ぶ土やすながだんだんとたまり、水深が浅くなっていきました。そのため、大きな船が入れるように、江戸時代に6回も港をつくりかえています。



1692年
つけかえの前



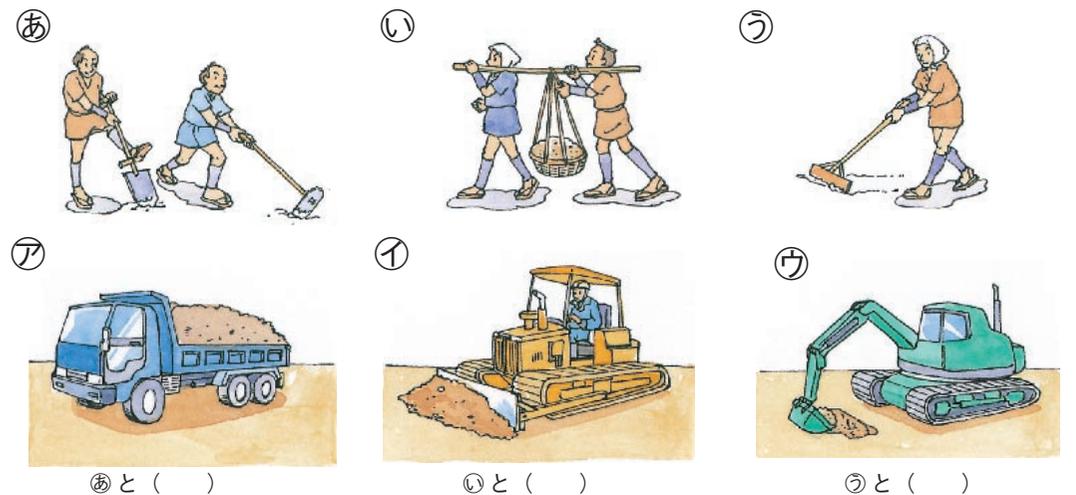
1707年ごろ
(大和川つけかえから3年)



1885年ごろ
(大和川つけかえから181年)
(「大阪春秋・堺のすべて」などをもとに作成)

クイズ 機械を使えばよかったな～

昔の土木工事などは、今のように機械を使うわけではないので、たいへん苦勞したんだよ。では、昔の工事で今の機械を使うとすれば、どの方法にどの機械を使えばいいのかな？



㉔と()

㉕と()

㉖と()